

# 英語コーパス学会 Newsletter No. 76

June 15, 2013

■会長:堀 正広  
■事務局:〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-8 大阪大学大学院言語文化研究科 田畑 智司研究室気付  
■TEL:06-6850-5866 ■郵便振替口座:00930-3-195373(英語コーパス学会)  
■URL: <http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/> ■e-mail: [jaecs.hq@gmail.com](mailto:jaecs.hq@gmail.com) ■twitter: @JAECs2012

**JAECs**  
Japan Association for English Corpus Studies

## シンポジウム「私のコーパス利用」ご来場御礼

4月27日(土)、大阪大学豊中キャンパスにて赤野一郎先生(京都外国語大学)の司会のもと、シンポジウム「私のコーパス利用」が開催されました。登壇者(敬称略)ならびに演題は次の通りです。

1. 「コーパスの(消極的)利用: 語法・文法・構文研究のために」 滝沢直宏(立命館大学)
2. 「理論に求める切り口」 深谷輝彦(椋山女学園大学)
3. 「コーパスシステム構築から見える英語学研究と英語教育」 岡田毅(東北大学)
4. 「英語史研究とコーパス利用」 家入葉子(京都大学)
5. 「私のコーパス利用: 研究・創作・趣味」 投野由紀夫(東京外国語大学)
6. 「シノニム・語法研究と辞書編集のためのコーパス活用」 井上永幸(広島大学)
7. 「マイニングとテキスト分析」 田畑智司(大阪大学)
8. 「3つの柱「テキストの読み, 言語理論, コーパスの利用」」 堀正広(熊本学園大学)

このシンポジウムはもともと昨秋の第38回大会第二日目のプログラムとして編成されていましたが、台風襲来のために中止となった企画です。今回、再スケジュールを行なうことで全体の時間を一時間ほど長く取ることが可能になり、講師一人ひとりの発言時間も増え、各講師のコーパス活用のプリンシプルや秘技についてより詳細に聴くことができたのではないかと思います。会場の教室は86名の参加を得て熱気に包まれました。当学会初代会長で顧問である齊藤俊雄先生にもお越しいだき議論に参加いただけたことは大変嬉しいことでした。閉会后、ディスカッションは懇親会会場である大阪大学総合博物館カフェ「坂」に場所を移して更に続けました。「七田」や「瀬祭」などの銘酒が議論に潤いを与えつつ、和やかな雰囲気を醸成したとおっしゃる参加者の感想をありがたく頂戴しました。

醸成したとおっしゃる参加者の感想をありがたく頂戴しました。

最後になりましたが、本シンポジウムの企画段階から舵取りをしていただいた赤野一郎先生、講師をお務めいただいた先生方、会場での業務を一手に引き受けていただいた事務局会計の小島ますみ先生(岐阜市立女子短期大学)、会場業務をサポートしてくれた大阪大学大学院言語文化研究科の大学院生各氏、そしてなにより会場に足をお運びいただいた参加者の皆様に心より御礼申し上げます。



齊藤俊雄先生を囲んで: 懇親会での一コマ(鳥飼慎一郎先生(立教大学)より写真のご提供をいただきました。)

## 第39回大会のご案内

英語コーパス学会第39回大会は、10月5日(土)および6日(日)の2日間、東北大学川内キャンパスで開催される運びとなりました。キャンパスへのアクセスは、JR仙台駅からバス約15分とのことです。事前に経路と時刻をご確認ください。

第39回大会は当学会にとって東北地方での初めての大会となります。現在、会場校の岡田毅先生に鋭意準備を進めていただいております。大会の目玉の一つとしましては、大会企画委員会(滝沢直宏委員長)の立案のもと、金澤俊吾先生(高知

県立大学) をコーディネータに「コーパスが語る  
こと、語らないこと」(仮題) というテーマでシン  
ポジウムを企画していただいております。東北地  
区での開催に相応しい陣容になるとのことでも  
楽しみです。もう一つ、特別講演では、文化現  
象の計量研究ならびにその教育実践の第一人者  
として活躍していらっしゃる村上征勝先生(同志  
社大学) にご登壇いただく予定です。どうぞご期  
待ください。

詳細については、8 月下旬に送付予定の「大会  
資料」をご覧ください。

### 第 39 回大会研究発表者募集

英語コーパス学会第 39 回大会において、発表を  
希望される方は、下記の要領に従って e-mail で事  
務局宛に奮ってご応募ください。

【分野】本学会にふさわしい、コーパス利用・コン  
ピュータ利用を中心に据えた英語研究。

【応募資格】本学会員であること。

【発表方法】発表 20 分、質疑 10 分。

【応募方法】冒頭に題名のみを記し、800-1200 字  
(参考文献は別) にまとめ、電子メール添付ファイ  
ルで送付。電子メール本文に氏名(ふりがな)、所  
属・職名、住所、電話番号、電子メールアドレス  
明記。

※審査の際、応募者が特定されないよう、事務  
局が応募書類を加工させていただくことがござい  
ます。

【応募締め切り】2013 年 6 月 30 日(日) 必着

【採否決定】2013 年 8 月中旬(予定)

【問合せ】〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8  
大阪大学大学院言語文化研究科  
田畑 智司研究室気付  
英語コーパス学会事務局  
e-mail: jaecs.hq@gmail.com

### 会誌『英語コーパス研究』第 21 号論文投稿募集 について

本ニューズレターとともに、『英語コーパス研  
究』第 20 号が同封されています。

『英語コーパス研究』第 20 号を節目に新たにデ  
ザインされた装丁、全 229 ページで刊行するこ  
とになりました。論文 1 点とともに、これまでの英  
語コーパス学会全大会のプログラム・発表概要、  
『英語コーパス研究』第 1 号から第 19 号までの目

次を掲載しており、当学会の 20 年間の歩みを振り  
返る上で貴重な資料集ともなっております。

続きまして、『英語コーパス研究』第 21 号の原  
稿を次の要領で募集いたします。会員各位の積極  
的な投稿をお待ちしております。

\*\*\*

『英語コーパス研究』第 21 号より、投稿申し込み  
締め切り、および原稿の投稿締め切り期日を従来  
より 2 ヶ月後ろにずらすことに決まりました。

\*\*\*

#### 【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に  
据えた「研究論文」、「研究ノート」、「実践報告」
2. 「書評」、「コーパス紹介」、「ソフトウェア紹  
介」、「海外レポート」、「論文紹介」などの各種情  
報あるいは紹介原稿

【投稿申込締め切り】2013 年 9 月 30 日(月)

氏名、所属、原稿の種類とタイトル、連絡先住所  
を下記の原稿提出先まで電子メールにてお知らせ  
ください。メール件名は『『英語コーパス研究』第  
21 号投稿申込』とし、メール本体に上記の情報を  
簡条書きで記入ください。

【原稿提出締め切り】2013 年 11 月 30 日(土)

電子メール添付にて提出してください。提出方法  
等についての詳細は学会 Web ページの投稿規定  
[http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/Guidelines/ECS  
\\_SGuide-j.pdf](http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/Guidelines/ECS_SGuide-j.pdf) を参照してください。

※なお、本文や図表の体裁および参考文献目録の  
表記の統一などに関して第 20 号を参照の上、十分  
にご配慮ください。

#### 【問い合わせ先・原稿提出先】

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41  
東北大学・大学院国際文化研究科 岡田 毅  
TEL: 022-795-7632 FAX: 022-795-7632  
e-mail: t-okada@intcul.tohoku.ac.jp

#### 【原稿の長さ】(厳守ください)

1. 研究論文  
和文: A4 サイズ 1 ページあたり 35 字×30 行、  
17 枚以内 (10.5 ポイント (MS 明朝) 使用)  
英文: A4 サイズ 1 ページあたり 70 ストローク

×35 行, 17 枚以内 (10.5 ポイント (Times New Roman)使用)

※いずれも Abstract (英文), 図表, 注, 参考文献目録, 付録を含む

## 2. 研究ノート

研究論文の書式と同様で, 12 枚以内

※いずれも Abstract (英文), 図表, 注, 参考文献目録, 付録を含む

## 3. その他

研究論文の半分以下

### 【書式】

第 20 号所収の論文を参考にしてください。詳細は上記の学会 Web ページで確認ください。

【採用通知】 2014 年 1 月下旬

【刊行予定】 2014 年 5 月下旬

※なお, 投稿申込 (9 月末締め切り) への応募の有無に関わらず, 11 月末の原稿締め切りまでに投稿頂ければ, 会誌への投稿は可能です。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長  
岡田 毅 (東北大学)

## 英語コーパス学会賞・奨励賞の募集について

第 12 回英語コーパス学会賞および奨励賞を募集いたします。学会賞は, 英語のコーパス利用を中心に据えた英語研究・教育, あるいはその関連領域の研究や学会活動などに, 多大な貢献が認められる業績に対して贈られる賞です。今までに, 著書, 一連の複数論文, コーパス分析ツールの開発などの業績に対して授与されています。

同時に, 特に若手研究者を対象に, 奨励賞も募集します。こちらは, 若手研究者の優れた業績に報いるために設けられた賞です。

どちらの賞の締め切りも, 今年の 6 月末日です。奮ってご応募ください。

### 【対象】

学会賞は, 英語コーパス学会の目的に照らし, 英語コーパスに関わる特に優れた研究業績 (著書, 一連の複数論文, コーパス分析ツールの開発, その他) をあげた学会員 (個人またはグループ) とする。

奨励賞は, 39 歳以下で, 英語コーパスに関わる優れた研究業績 (著書, 学会誌『英語コーパス

研究』に掲載された論文 1 編以上, コーパス分析ツールの開発, その他) をあげた学会員個人を対象とする。

【応募方法】 自薦, 他薦を問わない。

### 【提出書類】

1) 推薦理由書 (所定の書式 [Word, PDF] による)。以下のリンクからダウンロード可能。

Word 版 [http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaeacs/Admin/Award/nomination\\_form-j.doc](http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaeacs/Admin/Award/nomination_form-j.doc)

PDF 版 [http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaeacs/Admin/Award/nomination\\_form-j.pdf](http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaeacs/Admin/Award/nomination_form-j.pdf)

2) 単行本の場合: 事務局で用意するので送付は不要。論文の場合: 現物またはコピーを送付。

※ネットから自由にダウンロードできるものは, ダウンロード先の明示のみでよい。

※奨励賞対象が論文の場合は, 『英語コーパス研究』に限定されるので, 送付は不要。

### 【提出先】

〒560-6643 大阪府豊中市待兼山町 1-8 大阪大学  
大学院言語文化研究科 田畑 智司研究室気付

JAECs 事務局

E-mail: [jaecs.hq@gmail.com](mailto:jaecs.hq@gmail.com)

【応募期限】 2013 年 6 月 30 日 (日)

【審査結果の報告および表彰式】 2013 年度年次大会 (東北大学 10 月 5 日~6 日)

学会賞選考委員会委員長  
新井 洋一 (中央大学)

## 東支部活動報告

東支部では, 下記の日程で講習会および研究発表会を実施しました。ここでは, その概要を報告いたします。なお, 講習会および各発表者の概要については, JEACS 東支部ホームページ(<http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaeacs/jaeacs/workshop/conference2013.html>)をご覧ください。

【日時】 2013 年 3 月 9 日 (土) 10:30~17:10

【場所】 成城大学 (東京都世田谷区) (小田急線

成城学園前下車徒歩 4 分)

【内容】

・講習会

講習会：BNC<sub>web</sub> 入門

講師：石井康毅（成城大学）

参加者：24 名の参加があり、宮崎から岩手までの広範囲から参加があった。基本的な語の検索、表示方法の変更、ソート、コロケーションの作成方法から、サブコーパス作成、品詞指定の検索など BNC<sub>web</sub> を活用した検索方法を実習した。参加者には事前にアカウントを取得いただいたため、講習会はトラブルなく進行することができた。



東支部講習会「BNC<sub>web</sub> 入門」の様子（塚本聡先生（日本大学）より写真のご提供をいただきました。）

・研究発表会

午後の研究発表会への参加者は 24 名であった。前半の司会は、大羽良（中央大学）、後半の司会は、塚本聡（日本大学）があたった。

「一般教書演説における F. Roosevelt と H. Truman の人称代名詞の用法について」

伊藤亮太（法政大学大学院生）

Roosevelt と Truman の一般教書演説を資料として、その人称代名詞の用法から政治的な発言での言語使用の一面を明らかにした。特に *we*, *our* と大恐慌、第 2 次世界大戦などの政治的出来事との関係が高いことが示された。

「コーパス・リテラシーと統計検定」

久保田俊彦（明治大学）

言語研究で頻繁に使用される  $\chi^2$  検定の問題点を指摘し、問題提起を行った。特にサンプルサイズが大きくなるとほぼすべての差異が有意差ありとなること、正規分布が期待できない言語事象に  $\chi^2$  乗検定を用いることの問題点を指摘し、代わって効果量の使用を提案した。

「教育的観点から考える「動詞+動名詞」の用法：母語話者・学習者・教科書コーパスに基づく研究」

井上聡（神戸大学大学院生）

自身の高等学校での教授経験から、動詞+動名詞の学習者への導入方法の不十分さを痛感し、COCA と学習者コーパスの比較から、日本人学習者にとって最適な提示方法を提案した。学習書に示される当該構文のうち、母語話者において生起率の低いものを除き典型的な意味を組み合わせた「指導リスト」を作成・提示した。

「JEFLL Corpus に見られる基本色彩語の考察—色彩形容詞を中心に—」

内田富男（明星大学）

各言語における基本色彩語と英語学習者の色彩語の使用頻度との関連を調査した。JEFLL Corpus を利用しての色彩語の出現数は、日本語における色彩語の出現数とほぼ一致したこと、またトピックの影響から、*white* や *green tea* などの特有の語の過剰な使用がみられたことが報告された。

「日本人英語学習者コーパスにおける動詞一名詞コロケーションとコンビネーション」

佐竹由帆（青山学院大学非常勤講師）

英語学習者におけるコロケーションの使用状況について JEFLL および NICE を利用して調査した。その結果、日本人学習者はコロケーションの使用が十分ではなく、直訳的表現が目立つこと、多義語の学習方法に問題があることを示した。



「日本人英語学習者コーパスにおける異なる習得段階が示す語用論的能力の実態」

三浦愛香（東京経済大学）

NICT JLE Corpus からロールプレーと学習習熟度の関連を照査した。「買い物」に限定した場合、実質的に有効なデータの得られる範囲が限られること、習熟度が上がると丁寧表現もそれに応じてある程度増加することなどが示された。

東支部長

塚本聡（日本大学）

### 新入会員紹介（5月31日現在、Sは学生）

青木繁博	新潟青陵大学短期大学部
岩井千春	大阪府立大学
岸本映子	近大姫路大学
佐竹由帆	青山学院大学非常勤講師
清水真弓	バーミンガム大学大学院 S
高口圭轉	安田女子大学
田中徳幸	中京高等学校
永田亮	甲南大学知能情報学部
能勢卓	京都聖母女学院短期大学
冬野美晴	西南学院大学
大和文雄	関西大学大学院 S
山本玲子	大阪国際大学
渡部友子	東北学院大学
Blake, John	北陸先端科学技術大学院大学
Dax, Thomas	慶応大学

### 理事会の決定事項について

4月27日（土）13時より大阪大学豊中キャンパスで開かれた理事会におきまして、以下の議案が審議されました。

#### ■人事について

##### (1) 理事の「定年」の定義について

審議の結果、理事の定年を当該理事が65歳で迎える年度末とする案が承認されました。

##### (2) 学会賞選考委員会委員長・委員の退任・新任について

委員長退任：深谷輝彦先生（椋山女学園大学）

委員長新任：新井洋一先生（中央大学）

深谷先生、これまで委員長の重責を担っていただきありがとうございました。新井先生、お忙しい中、激務の役職をお引き受け下さりありがとうございました。どうぞよろしくお願いいたします。

委員退任：大津智彦先生（大阪大学）

委員新任：保坂道雄先生（日本大学）

大津先生、長きにわたり大いにご尽力いただきまことにありがとうございました。保坂先生、これからどうぞよろしくお願いいたします。

##### (3) 大会企画委員の任期について

大会企画委員は次年度の大会の企画を考案する必要があるため、任期終了を従来より一ヶ月後ろにずらし、4月30日とする提案がなされ、審議の上承認されました。

#### ■2012年度決算報告と2013年度予算案について

会計の小島ますみ先生（岐阜市立女子短期大学）より、古田八恵先生により監査を受けた2012年度決算の報告と2013年度予算の提案があり、審議の結果、承認されました。詳細は同封の2012年度決算報告書ならびに2013年度予算案をご覧ください。

#### ■入会申し込みの電子化について

事務局より、入会申し込み手続きを従来の郵送方式から電子メールでの手続きに変更するという提案がされ、審議の結果承認されました。また近いうちに、当学会ウェブサイトから直接入会手続・会費納入ができるようにするという改善案も併せて承認されました。

#### ■後援依頼について

本年9月19日～21日に開催される第3回日本デジタルヒューマニティーズ学会(Japanese Association for Digital Humanities)年次国際会議(JADH 2013)への財政支援を伴わぬ後援依頼について了承されました。デジタル環境下の人文学を推進するJADH 国際会議の射程には当学会の活動領域に属する研究・教育分野も含まれております。

## ■今後の大会日程と開催校

第 39 回大会 2013 年 10 月 5-6 日 東北大学

第 40 回大会 2014 年 10 月 4-5 日 熊本学園大学

## 事務局から

### ◇会費納入のお願い

2013 年度会費（一般 5,000 円，学生 3,000 円）を，日本郵便にある払込取扱票を使ってお納めいただきますよう，ご協力をお願いいたします〔振替口座：00930-3-195373〕。日本郵便発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので，ご了承ください。別途領収書が必要な方は，80 円切手を同封の上，小島ますみ（〒501-0192 岐阜市一日市場北町 7 番 1 号 岐阜市立女子短期大学）までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

過年度会費未納の方は，2013 年度分と併せてお納めください。会誌『英語コーパス研究』第 20 号は 2012 年度の会費を納入していただいた方のみ，送付いたしております。また，2 年続けて会費未納の場合，*Newsletter* などの送付を中止させていただきます。

住所，所属などに変更や異動のある方は，必ず払込取扱票の通信欄にお書き添えください。

※ 会員の皆様には，日頃より会費の当該年度内納入のご協力をいただきまして，お礼申し上げます。会費を滞納されますと，退会時に滞納分をまとめてお支払いいただくといった事態にもなりかねません。会員の皆様におかれましては，円滑な学会運営のためにご協力いただけましたら幸いです。なお，退会を希望される場合は，当該年度内に事務局までお知らせくださいますようお願い申し上げます。

### ◇ニューズレターの電子化移行について

当学会の財政状況改善および業務の効率化を図るために，理事会ではニューズレター第 77 号（平成 25 年 12 月発行）にて紙媒体での刊行を終了し，翌第 78 号よりメーリングリストならびに当学会ウェブサイトを紹介した電子版のみの配信とする方向で検討しております。メーリングリストに未登録会員の皆様はお早めにご登録いただきますようお願いいたします。メーリングリスト新規

登録・変更は事務局宛にご一報下さい。

### ◇メーリングリストについて

英語コーパス学会ではメーリングリストを使って会員の皆様の様々な情報交換に役立てていただいているところですが，宛先不明でエラーが返ってくる例も増えています。会員の皆様方には，電子メールアドレスに変更が生じた場合，速やかに事務局宛ご連絡いただけますようお願い申し上げます。

### ◇寄贈刊行物の紹介

Yoshiyuki Nakao (2012), *The Structure of Chaucer's Ambiguity* (Peter Lang). [中尾佳行先生より寄贈]

石井正彦・孫栄爽 (2013) 「マルチメディア・コーパス言語学」大阪大学出版会 [石井正彦先生・孫栄爽先生より寄贈]

Shin'ichiro Ishikawa (ed.) (2013) *Learner Corpus Studies in Asia and the World Vol. 1* (School of Languages and Communication, Kobe University). [石川慎一郎先生より寄贈]

稲木昭子 (2013) 『謎解きのことば学—アガサ・クリスティの英語を楽しむ』英宝社 [稲木昭子先生より寄贈]

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

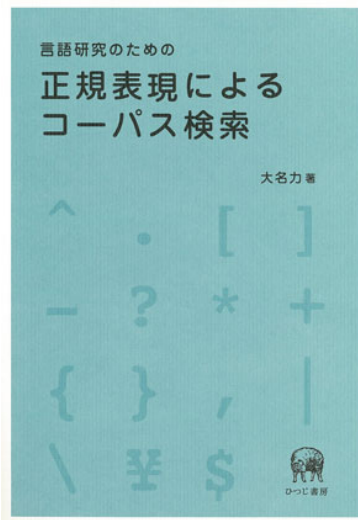
## FORUM

### ◆ 新刊紹介

大名力『言語研究のための正規表現によるコーパス検索』（ひつじ書房, 2012）

ISBN: 978-4-89476-560-3

最近ではコーパスの利用が一般化し，言語系の研究者に限らず「コーパス」という言葉を知っている人が増えている。大学院に入学したばかりの院生に，「コーパス」という言葉を知っているかと尋ねると，ほぼ全員が「使ったことはないが，聞いたことはある」と答え，漠然とではあるがコーパスがどんなものであるかについてのイメージも持っている。しかし，コーパスという言葉がこれ



だけ普及しつつも、コーパスの利用にあたって正規表現を駆使している人となるとまだまだ少数派という印象がある。諸本に、正規表現のメタ文字の一覧表や簡単な使用例が載っている場合も多いので、多少使ったことがあるという人は多くても、「駆使」し

ているという状態には至っていない利用者は多いと思われる。

その理由を忖度するに、正規表現に関する本がこれまであまり出版されてこなかったということが考えられる。否、正規表現の本はあった。何冊も。何百ページから成る大著さえある。しかし、「言語研究のための」という限定を付けてしまうと、極端に数が少なくなる。ひょっとすると、大名力（おおなつとむ）氏が出版した本書がほとんど唯一かもしれない。

著者の大名氏は、英語学、生成文法、動的文法理論を専門とし、データ取得および仮説検証の重要なツール（の一つ）としてのコーパスに深く精通した研究者である。現在、名古屋大学・大学院国際開発研究科・国際コミュニケーション専攻の教授として活躍し、英語コーパス学会でのワークショップの講師なども複数回つとめているベテランである。（評者は、前年度まで、職場の同僚として、大名氏から正規表現その他について、直接、多くを教えて頂く幸運に恵まれた。大名氏のお蔭で、正規表現を使うのが日常的になったとさえ言える。）

正規表現の利点を一言で言うと、コーパス（あるいは広く電子テキスト一般）を扱う際に、自分が欲しい（あるいは逆に欲しくない）と思っている文字列（文など）を厳密に指定することができるということである。例えば、一行一文に整形されたテキストに対して、以下のような正規表現を用いて検索すると、英語の現在進行形のうちの平叙文と否定文がかなり抽出できる。

```
\b(ain't|lam( not)?|I(are|is)(n't| not)?|'
(ml|re|ls)( not)?) [a-z]+in(g\b|' )
```

この正規表現の末尾を見れば、*i'm lovin' it*（マクドナルドの宣伝文句）のように、*-ing* の *g* がアポストロフィになっている文も抽出対象として指定されていることが読みとれる。しかし、この正規表現では、*He is now reading a book.*のように副詞が介在しているごく普通の文が漏れてしまい、その一方で *This book is interesting.*のように進行形ではない文が混入してしまう。これも上の正規表現を見れば一目瞭然である。

多少の該当例の漏れや非該当例の混入があっても研究目的に照らして困らないのであればこのままで良いが、それでは困るということなら、上の正規表現を手直し、もっと複雑なものに修正すれば良い。そして、正規表現で明示しさえすれば、何を検索対象とし、何を検索対象にしていないのかを一義に指定でき、読み手の側に曖昧性を持たせることなく、指定文字列のパターンを伝えることができる。「これが「私にとっての」現在進行形です。」という定義を正規表現で示せば、曖昧さが全く生じないということである。コーパス検索においてどのような正規表現を用いているかを明示することは、理系において実験方法の詳細を示す必要があるのと似て、重要なことである。

上記の表現には色々な記号が使われていて、正規表現を知らないうちはおまじないのようにはしか見えなくても、本書を順を追って読めば上の意味が十分に理解でき、自分で類似の正規表現が自信をもって書けるようになる。のみならず、該当例が漏れる問題や非該当例が混入する問題など、言語研究上、注意を払うべき事柄がよく分かるように書かれている。「ここまで書くか」と思われるほどの細部にわたる情報も大変貴重で有り難い。研究においても「神は細部に宿る」のであり、細部にこだわるにあたっては正規表現の利用が有効である。

コーパスは正規表現と組み合わせてこそ、その威力を発揮する。しかし、それには留まらない。この正規表現だとどのような漏れが生じるか、どのようなゴミが混入するのかといったことを考えるには、研究対象としている言語に関する明示的な知識が不可欠だが、正規表現で表現しながらそのようなことを考えることで、その言語に関する知識自体が緻密になる。これは正規表現を勉強することの大きな副産物である。

コーパス利用上の問題点を常に意識しながら精密にコーパスを利用しつつ英語学の研究を続けて

きた大名氏は、この種の本を書くには最適な人物の一人だと言える。挙げられている例自体も、英語学を専攻する者には実に興味深い。例えば、繰り返し表現を示すのに、*Boys will be boys*のようなありふれた文だけではなく、わざわざ *There is nervous and there is nervous*のような形容詞の繰り返しを含む特殊な *there* 構文も例として挙げている。そんな巧妙な細工を施す正規表現の本は、本書以外にはまずないだろう。初級編、中級編、上級編と徐々に難しくなっていくが、上級編まで読み進めば、自由自在に自分の研究に応用することができるようになる。

本書は、英語だけでなく日本語や韓国語を含む諸言語のコーパスを扱うためのマニュアルとして読むこともできる。しかし、その価値は、勿論それに留まることはない。言語研究をするにあたって「コーパスを使うとはどのようなことなのか」という根源的な問題までをも考えさせてくれる良本である。

この本は決して気軽に読める本ではない。それは、そもそもコーパスは気軽に使えるものではないということもあるが、同時に本書が格別、精密に書かれているためでもある。ちゃんと机に向かって真剣に読み、できれば実際に正規表現を自分で書き、テキストエディターなどを使ってテキスト処理を実践しながら読み進めると、効果は絶大である。本書を読了する頃には、正規表現に精通し、その知識によってコーパス利用の価値が大いに高まること、請け合いである。

滝沢直宏 (立命館大学)  
takizawa@li.ritsumei.ac.jp

Yamazaki, S. and R. Sigley (eds.)  
*Approaching Language Variation through Corpora*  
*A Festschrift in Honour of Toshio Saito.*

Series: Linguistic Insights. Studies in Language and Communication. Vol. 167 (Bern, Berlin, Bruxelles, Frankfurt am Main, New York, Oxford, Wien: Peter Lang, 2013. 421pp.)

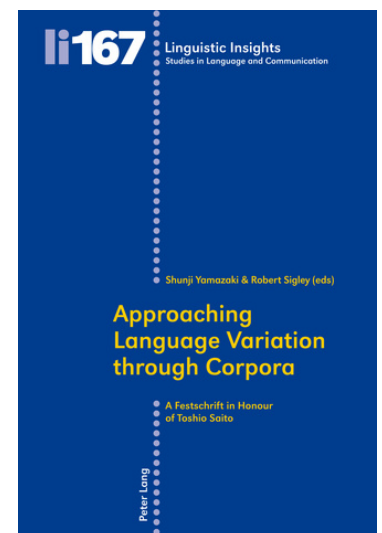
ISBN: 978-3-0343-1264-6 pb. (Softcover)

本書は、英語コーパス学会 (JA ECS) の創設者、日本におけるコーパス研究の草分け的人物の一人である大阪大学名誉教授・前大東文化大学教授齊藤俊雄先生の長年の貢献と業績に対する記念

号である。日本における全国的な研究組織としての英語コーパス学会の活動に対して、ICAME (International Computer Archive of Modern and Medieval English) の年次大会 24th ICAME (2003, April 23-27, St. Peter Port, Guernsey, British Isles) でその荣誉を称えて名誉団体会員第 1 号と認定され、たまたまその学会に参加した際に当時の会長ヘルシンキ大学 M. Rissanen 教授からその証書を代理で受け取った日の事を昨日のように覚えている。勿論、ランカスター大学 G. Leech 教授、ルンド大学 J. Svartvik 教授、オスロ大学 S. Johansson 教授等、いわゆる英語コーパス言語学の第一世代と言われる著名な学者からの力強い後押しがあったことは言うに及ばない。筆者が覚えている限りにおいては、後にも先にもこのような認定をされた学会は英語コーパス学会のみである。国際的にもこの英語コーパス学会への関心の高さと活動への賞賛がうかがえる。初代会長として英語コーパス学会の創設・発展に大いに寄与された齊藤俊雄先生のご尽力・ご努力に改めて敬意を払うものである。

本書の Foreword で G. Leech 教授は、日本のコーパス言語学の pioneer で英語コーパス学会の創始者である齊藤俊雄先生に対して温かいことばと高い賞賛を呈している。1968 年に University College London で Randolph Quirk 教授の門下生として二人が初めて会ったこと、その後英語コーパス言語学が著しく発展したこと、また言語学研究におけるコーパス言語学の果たす役割と重要性を述べて、世界最初であり、またコーパス言語学の唯一の国内的な学会である JA ECS という学会の創始者の一人として齊藤俊雄先生を高く評価している。

本書の主要な目的は、コーパス言語学における variation 研究のための広範囲な研究方法を示唆することであり、その研究方法やテーマへの取り組み方、これからの研究者への手引きとすることである。その variation 研究には、異なる言語環境における使用頻度の違い、文体、時代・地域差における違い、





個人や社会層間における違いなどが含まれている。

本書は 4 部で構成されていて、7 編の海外研究者 (S. Johansson, R. Sigley, S. Hoffmann, G. Kennedy, M. Rissanen, P. Peters, M. Stubbe) の論文に加えて、6 編の日本人研究者 (深谷輝彦, 山崎俊次, 齊藤俊雄, 家入葉子, 塚本聡, 堀正広) の論文が寄稿されている。なお、これら日本人執筆者は全て英語コーパス学会の会員である。

第 1 部は variation の多次元解析をもとにその方法論の解説をしている。最初の S. Johansson 教授の論文は、2010 年に急逝される前に受領した遺作となった論文であり、法助動詞 *shall* を使った研究方法を示しており、また R. Sigley 論文は LOB, Brown コーパスで ‘formality index’ を使った解析方法を述べている。S. Hoffmann & R. Sigley 論文は、命令的接続法 (mandative subjunctive) における *that* とその削除について解析している。

第 2 部は、現代英語 (BNC, ICE-GB, Brown, LOB, Frown, FLOB) における言語環境の違いにおける言語使用の特徴を述べていて、BNC における 10 個の動詞の collocation における意味的特徴を述べている論文 (G. Kennedy), 接続詞 *when, though* の統語的特徴を述べた論文 (深谷輝彦), 比較級, 最上級の異なるテキスト, 時間, 地域における差異を述べた論文 (山崎俊次) の 3 編で構成されている。

第 3 部は、通時的研究にその主眼が置かれた論文 4 編で構成されている。最初の 3 編はより限定的な変数の中で述べており、古英語における副詞的従属標識 *De, Dæt* の発達と使用の違いを述べた論文 (M. Rissanen), 初期近代英語のコーパス (PPCEME) を使って動名詞の統語的盛衰を述べた論文 (齊藤俊雄), 中英語に頻出した *that* 節と共起した動詞 *pray* の発展について Chaucer と Caxton の文章から検証した論文 (家入葉子) からなっている。最後の論文は、多次元的アプローチで中英語の言語変化を解析した論文 (塚本聡) である。

最後の第 4 部は、より限定的な範囲で解析していて、特別な語類, 個人・集団・社会間における variation を研究した論文で構成されている。比較可能な 3 つの ICE-Corpus (Australia, New Zealand, Britain) を使って、人称代名詞の使用と伝統的な文体と敬意表現の比較を試みた論文 (P. Peters), さらに残りの 2 編は限定的なケーススタディであ

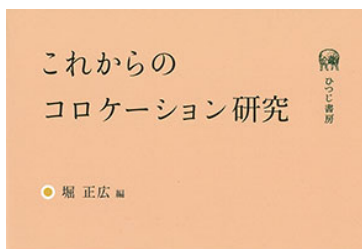
り、Hemingway の短編 ‘Hills Like White Elephants’ の男女の会話の機能語の文体を BNC の会話の機能語のデータと比較して分析した論文 (堀正広), Wellington Corpus of Spoken New Zealand English を使って男女間, そして談話変数が会話においてどのような影響を与えるかといった研究論文 (M. Stubbe) で構成されている。

本書は、日本のコーパス言語学の隆盛に大きく寄与された齊藤俊雄先生の功績に対して高い賞賛と敬意を持って編まれた記念号である。海外から多くのコーパス言語学者が寄稿し、国内からは英語コーパス学会の研究同志が敬意を持って寄稿した論文集である。是非ご一読いただきたい書物である。

山崎俊次 (大東文化大学)

yamazaki@ic.daito.ac.jp

#### 堀正広編『これからのコロケーション研究』 (ひつじ書房, 2012) ISBN 978-4-89476-548-1



本書は、2009 年 11 月 15 日に開催された日本英語学会第 27 回大会のシンポジウム「これからのコロケーション研究」における発表原稿を核とし、さらに 2 点の論考を加えて編まれたものである。本書の目的は「英語と日本語の研究において、コロケーション

の視点からどのような研究が可能であるかを提示する(p.1)」ことであり、次のような章立てになっている (かっこ内は執筆者)。

1. 序章 (堀正広)
2. 英語教育とコロケーション (小屋多恵子)
3. 辞書とコロケーション (赤野一郎)
4. 文体とコロケーション (田畑智司)
5. 英語史とコロケーション (渡辺秀樹)
6. 日本語のコロケーション (田野村忠温)
7. コーパス利用の落とし穴 (大名气)

これらのうち、6 章と 7 章が新たに付け加わった

ものである。

本書の特徴として、次の点を指摘しておきたい。

・7章を除く各章が基本的に、(1) 各分野におけるこれまでのコロケーション研究の概観、(2) 執筆者によるコロケーション研究の事例、(3) 将来の研究の展望や新たに研究を始めようとする人々へのメッセージから構成されていること。

・7章においては、コロケーション研究に不可欠なコーパスを利用する際に注意すべき点を具体的に指摘していること。

以下、簡単ではあるが各章の内容を紹介する。

1. 序章：Firth に始まり、Sinclair, Halliday らに引き継がれるコロケーション研究の潮流の概観、コロケーションという用語の定義など、コロケーション研究に携わるものが心得ておくべき事項が簡潔にまとめられている。

2. 英語教育とコロケーション：国内外のコロケーション習得研究の動向を紹介するとともに、日本のコロケーション教育の問題点、実態を指摘している。さらに、学習者、英語教育の両面について、これから進むべき方向を提言している。

3. 辞書とコロケーション：学習辞典、コロケーション辞典記述の変遷・進化、辞書記述におけるコーパスを利用したコロケーション研究の有用性が豊富な事例で示される。また、「日本人学習者のためのコロケーション記述」という視点から試案が提示されている。

4. 文体とコロケーション：近年急速に進展しているコロケーションの観点からの文体研究の一例として、多変量アプローチの手法を用いた Dickens の文体の分析が報告されている。分析の方法論について丁寧な解説が加えられるとともに、図や KWIC のコンコーダンスラインを駆使して、結果が分かりやすく説明されている。

5. 英語史とコロケーション：まず、コーパス言語学以前の、英語史（フィロロジー）の分野におけるコロケーション研究の歴史が詳細にたどられている。次に *ago* を取り上げ、その副詞化、文法化のプロセスを *OED2 on CD-ROM*, *BNC*, *COHA* 等の検索結果に基づいて実証的に論じている。

6. 日本語のコロケーション：まず日本語研究におけるコロケーションに関わる概念の変遷と研究史が詳述され、続いて近年の日本語におけるコロケーション研究の動向が述べられる。日本語の特性に由来する、研究上のさまざまな問題点にも言

及されている。

7. コーパス利用の落とし穴：「コロケーション」の定義、検索対象の設定、コーパスの構造、データの形式、統計値の解釈など、基本中の基本でありながら見落とされがちな点を指摘し、安易なコーパス利用に警鐘を鳴らしている。章末の「チェックリスト」はきわめて有用であり、初心者もベテランも等しく、絶えず参照すべきものである。

序章を除く各章には 40 ページ前後の紙数が割かれており、どれも読み応えがある内容となっている。

本書の特筆すべき点は、各章が執筆者の研究成果の披露で終わらず、これからそれぞれの領域に足を踏み入れるであろう人々へのメッセージを含んでいることである。特に、十分な経験に裏打ちされた「読み」の重要性を説く 4.3.5 「ツールにまかせるべき仕事と人間にしか出来ない仕事」、5.3.2 「英語史の分野でのコロケーション研究の新資料と注意点」、事前にコーパスデータを入念に吟味する必要性を説く 6.4.4 「コロケーションの研究手法をめぐって」には強い感銘を受けた。

コロケーションに限らず、コーパスを利用した言語研究を行う者はぜひとも手元に備えておきたい一冊である。

西村秀夫（三重大学）  
nishimur@edu.mie-u.ac.jp

---

2013年6月15日発行

編集・発行 英語コーパス学会  
会長 堀 正広  
事務局 〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8  
大阪大学大学院言語文化研究科  
田畑 智司研究室気付  
電話：06-6850-5866  
e-mail: jaecs.hq@gmail.com twitter: @JAECs2012  
URL: <http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/>

---

